



復員列車で 青森に行く



koberyol

戦争は終わった。〇〇〇空旭部隊の自分たちは、終戦の玉音放送を聴いてからあとのことは、なにごとも上の空になってしまった。放心状態がつづき、いったい何から手をつけていいものやら、さっぱりわからなくなってしまったのだった。

戦時中と比べて一転、丁寧な言葉で「あと始末がついた者から申告してください」と言われたものだから、ずいぶん面喰らったものだった。部隊は解体されるから、それぞれ家族のもとへ帰るように、とのお達しだった。軍隊は消滅し、日本人は久しぶりに個人へと帰るのだった。戦争が終わってしまったということに、少年は余りピン、とこなかったが、心の整理がつかないまま、胸中はゆれていた。子どものころ遊んだ凧のように、ふわふわ飛んでいる、そんな気持ちだった。

戦争があるおかげで存在していた、さまざまな物事が音をたてて崩壊していった。軍隊がそうだし、海軍がそうだった。自分が堅く信じていた信念もそうだった。緊張感が一気に吹っ飛んでしまったのだから、今までやってきたことは何なんだろうと思った。わたしは戦争が終わったにもかかわらず、まだ海軍の兵舎でぐずぐずしていた。だが、それでやっと、自分の身の回りの品々の整理がつき、私物をふくめ、軍服・作業服を背囊につめて、略帽を被った姿で整理が完了した旨を残務整理をしている係りの者に申し出た。「どこまで帰るのか」と質問されてので、東京は焦土となっているし、「青森県の弘前市」と言った。

帰る途中の食糧、と言われてダンボール箱から手渡されたのがビニール袋に入った「米粉（こめこ）」が三袋だった。米粉に水をくわえて、インスタント餅をつくり、道中、それを保存食として食べるのだ。おもしろい食料をもらったものだ、と思った。

さてさて、自分はほんとうにどこに行ったら良いのか、あらためて考えていた。昭和20年の6月頃だったが、父から一通のハガキが届いていた。その内容は、「3月10日にアメリカの爆撃機による空襲にあい、東京は焼け野原になってしまった。食糧はないので、母と弟は、母の実家に疎開し、いまは青森の弘前にいる。家族全員は無事であるから」という知らせだった。宛先は軍ではなく、卒業した横須賀通信学校になっていた。

このハガキがめぐりめぐって、わたしの眼の前にある不思議を思った。そして自分

が育った家が焼かれたことなど考えて涙があふれでて止まらなかった。そのような葉書がきていたものだから、すぐに青森の弘前にむかって旅立てばよかったものの、終戦のショックのせい、心とアタマが今ひとつチグハグで迅速にこうどうできなかつたし、時間の感覚も失われていた。

元一等兵で同僚だった通信兵のHさんとは、終戦からあと、行動が別になった。Hさんはもう少し軍の施設にとどまり、状況を判断するための情報を集める、と言われる。Hさんの家族は、疎開先にいるということや、Hさんの実家は小田急沿線の「大根（おおね）」で旧家であった。実兄は小田原市役所の助役さんであることなどがわかった。いつでもHさんの動向は実家でわかるようにしておくからといわれ、実家の住所をしるしたメモをもらった。これが将来、役立つとは夢にも思わなかった。

国が仕立てた復員列車をどこで乗ったのか、まるで記憶がなかった。どうしても記憶がでてこないのだ。たぶん、松江駅で乗車したのだと思う。列車は陸・海軍の元軍人で、車内はぎっしりとすし詰め状態となり、空席はなく、通路に腰を下ろしたり、寝ている者が多かった。列車は九州からじょじょに車輻を増やし、延々と七、八輻連結していた。

この列車は、本州を縦貫するのだと推測した。それは終着駅が「青森」だったので、そう思った。車中はムンムン蒸れて汗臭かった。男で満杯の列車である。席を確保した仲間と時間をきめて交代で座ることにした。

途中、腹が減って「米粉」を食べた。停車時間が長い駅で降りて、水道まで行って飯盒のフタにとってコネて食した。米粉は唯一の食事だった。はじめは「なかなか」のものと思って食べていたが、だんだん口に合わないように思えてきた。小便は窓から出入りして停車する駅で用を足した。夕方、「京都駅」にやっと着いた。

駅のコンコースとでもいうのか、中央広場では喧嘩があった。群衆が二人をぐるりと囲み、まさに真剣の日本刀をもち、正眼のかまえをしているところをみた。正眼の構えは長くつづいた。

二、三分もたつたろうか。そのうち、列車はガタン、と大きく揺れ、動きだした。二人の様子はわからなくなったが、たぶん、予科練の生き残りではないか、と推測した。

京都駅から山陰本線、北陸本線、奥羽本線を通じて青森へ行くのだ。満員でけっして快適ではない車内で、じっと辛抱。それぞれが無口になって何も喋らなかった。

途中下車する者、途中乗車する者たちがいた。じつに生命感あふれた、逞しい人々だと思った。戦争を生き延び、これからも生きてゆく。いや、せんごの自由な空気のなか、生命を謳歌し、たぎらせ、いきでゆくのだ。これらの人々の考えはみんな違うし、温度差はあるが、この漲る活力は無限、戦争には敗北したが、これぞ武士道精神の根っこにあった汲めども尽きぬ猛烈なパワーだと思った。

そして今までの自分の考え方はどうなのか、と思った。日本国がこれからどうなっていくのか、その行く末を思案したりもした。敗戦後、国はこの先、どのように歩いていくのか、わからないことだらけだった。

ともあれ、人々のさまざまな思いを乗せ、列車は走った。車内では「暑い」、「疲れた」、「腹が減った」、「冷たい水が飲みたい」、「列車が遅い」などの愚痴を聞いた。自分も言ったし、それが苦しい車内での、せめてもの自分を慰める言葉だと感じた。

ガタガタと遅い列車は二日ばかりで青森駅へと着いた。着いたものの腰が伸びず、しばらくベンチでじっ、としていた。それぞれが思い思いの道を歩いて散っていった。

「これも人生、これが人生だ」。

これから自分の人生を創り出すのだ、と強かつよく思った